

勿凝学問 208

人は消費者であり労働者でもあるという人間の二面性について

2008年12月20日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

先日、社会保障国民会議の雇用年金分科会で知り合った人たちと飲んでいた。途中、相も変わらず、僕は雇用年金問題とは関係のない話——医療の話などをしはじめていた。

「日本の医療費は、やっぱり低すぎるんだよねえ……」と言うと、
「安くて、良いじゃないですか」と。

まあ、まんざら間違えてはいない反応ではある。さて、以下は、この話と関係のあることである。

今年のゼミの4年生の卒論テーマは、全員と言って良いほど労働問題。時代を感じさせてくれる。

彼ら、否、世の中は、ようやく人は消費者であり労働者でもあるという人間の二面性に気づいてきたのであろう。

うちのゼミではそういうことはなかったけど、一昔前の流行は、みんな揃って、生産物市場の需要供給曲線を描いては、規制緩和を行って何事も市場に任せる方が消費者余剰が高まることを、いかにもっともらしく経済学の専門用語を用いて説明するかの技を競い合っていた。

でもねえ、ということで、先日も学生に、「労働市場は、生産物市場の何市場というんだ？」と問う。僕から指された3人目くらいの学生が、「派生需要ですか？」と。「そう、僕のI巻の6章に何度も出てくるから、読んどけよ。でもまあ、派生需要という言葉は出てこないけど、今何が起きているのかを知るには、ロバート・ライシュの『暴走する資本主義』の方が役立つなあ」。

生産物市場の需給均衡点から派生される労働市場の賃金率が、労働者の最低生活費を保障する機能を市場は必ずしももっていないんだよね。

生産物市場のみを切り離れた議論を許す経済学——どこかがおかしいというか、隠れ経済学ファンである僕は、そうした経済学しか学んでいない人がやはり問題なんだよなと言いたい。

一昨日だったか、慶應商学部の同僚との会話。

「俺たち二十歳の頃から辻村先生の『経済政策』なんかを読まされていて、バーゲニングポジション、交渉上の地歩とかをあの頃から知ってたんだよなあ」

「ビーバー、鹿さんだろお」

そしてさっきは嫁に、「辻村先生の経済政策とった？」と聞くと、「エジワースボックスの δ ゾーン β ゾーンだよな」。

おまけに僕は、何を間違えたか、三田の学生だった頃、辻村先生の本と同じ筑摩から出ている隅谷三喜男先生の『労働経済論』を、労働経済学と労働経済論はどこが違うんだあ？というくらいの軽い動機で読んでいたりもする。よほど暇だったんだとしか思えないが、実際、ものすごく暇だったわけでもある——ちなみに、三田の図書館に隅谷三喜男著作集の配架を頼んだのは僕であったりもする。

生産物市場での経済政策と労働市場での社会政策、そのつながりに注意を払いながら両政策のバランスをいかにしてとっていくか——社会経済政策というのは、いわばアートであって、作品を仕上げていくのは至難の技のはずなのだが、そのあたりで話が合う人はほんっと少ない。

人は消費者であり労働者でもあるという人間の二面性、そうした側面をすっかり忘れてしまったここ 10 年以上の構造改革ブームの反動が、今の学生の卒論を支配している——彼らが卒論の執筆のためにもがき苦しみながら労働問題を考えている様子を見て、世の中、少しは明るい方向に向かうのではないだろうかとほんの少し希望をもっていたりもしているわけである。まあ、彼らをもがき苦しませているのは、実は労働問題ではなく僕なんだけどね。。

さて、最後に医療に話を戻しておけば、

2007 年 1 月 15 日(座談会 2006 年 11 月 14 日)

- 座談会「[医療と経済——柳澤伯夫厚生労働大臣・大久保満男日本歯科医師会会長](#)」『日本歯科医師会雑誌』(Vol.59 No.10)

権丈 未曾有の高齢化の中で、いま医療費適正化をやっておかないと将来が危なくなる

という形でずっとやってきているわけですが、1つ考えなければいけないことは、医療費の生産と支出と分配は三面等価であるということです。生産面、支出面を抑制、効率化することは、分配面が痛い目に遭っていることを意味します。今、その分配面で歯科医師、そして一般診療の医師が相当危ないところに来ています。支出側面は、平等な消費という形で理想的な展開になっている。生産側面は、医療費抑制がほかの国と比べてうまくいっている。

しかしいま一番痛いところは分配面です。日本の医療費の分配は、大元の財源を国が押さえ、それを診療報酬・薬価基準を通してミクロに分配しているわけです。支出面では平等な消費ができていて、生産面では医療費の抑制が他の国から見たらうらやましいほどに成功している状況ですが、分配面で日本の医療は全般的に崩壊寸前にあり、医師不足が深刻な地域ではすでに医療崩壊が始まっています。

大臣の選挙区のところでも2つの大都市、静岡・浜松に挟まれて、医師不足が極めて深刻な状況、かなり危ない状況になっています。今そういうことが起こってきて、医療の担い手が疲弊している状況になってきて、地域医療になると、完全に危ない瀬戸際に来ています。これから先は、医療における三面等価の原則を意識しながら、医療費を抑制することは医療の分配を抑制することに等しいのだという観点を忘れないで政策を評価していかないといけないと私は受けとめております。

．．．

柳澤 権丈先生が、分配がうまくいっていないのではないかとおっしゃいましたが、私はそういう光を当てての論議はきょう初めてお聞きいたしました。

補論 額縁付きエジワースボックス（一般化されたエジワースボックス）

▶ 奥さんのおっしゃる「エジワースボックスの δ ゾーン β ゾーンだよな」とはどういうことですか？

との問い合わせがありましたので、回答します。

スタートは、次のアダム・スミスの文章からはじまるのが良いと思う。

〔雇い主と労働者の〕両者が対立したときに通常どちらが有利な立場にあり、相手に自分の条件をのませるかを予想するのは難しくない。雇い主は人数が少ないので、団結するのがはるかに容易だ。……賃金をめぐる争議では、雇い主の方がはるかに長く持ちこたえられる。……労働者を1人雇わなくても、それまでの蓄えで一年や二年は暮らしていけるのが普通だ。これに対して労働者には、仕事がなければ一週間ともたない人が多く、一ヶ月持つ人は希だし、1年もつ人はまずいない。長期的にみれば、

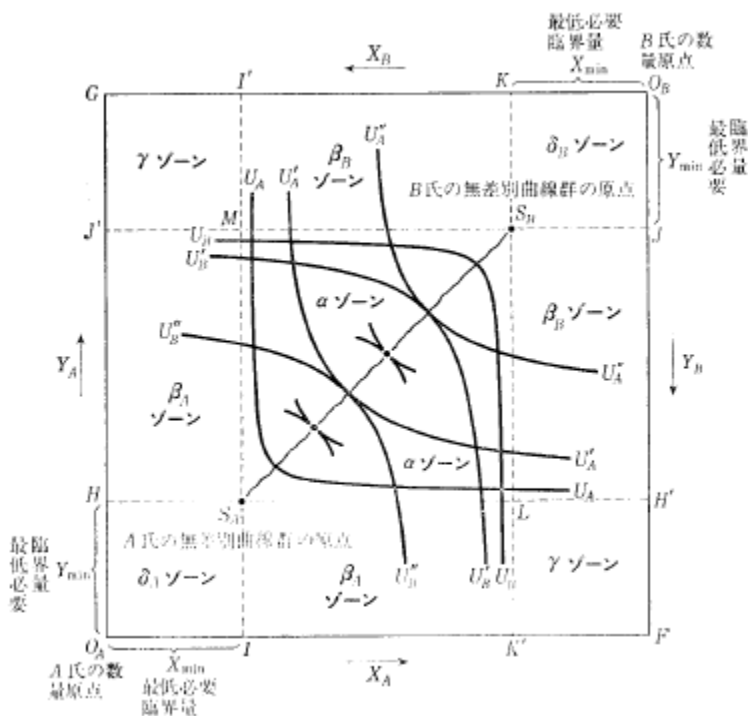
労働者にとって雇い主が必要なのと変わらないほど、雇い主にとっても労働者が必要だとしても、その必要性は切迫したものではない。

アダム・スミス／山岡洋一訳(2007)『国富論』 p.70.

こうした労使間の「交渉上の地歩(bargaining position)のアンバランス」を、どのようにして描写するか？

ここで、わたくしが（効用可能性曲線や社会的厚生関数を説明する際にも）講義でよく使うエジワースボックスに登場してもらおう。これはエジワースが考案した思考ツールであり、A氏の選好場（無差別曲線群）の原点を南西に描き、B氏の選好場の原点を東北に置いて、両者の選好場を向かい合わせた箱（ボックス）のことである。

次に、エジワース自身は想定していなかった X 財と Y 財に関する最低必要臨界量を組込んだ額縁付きエジワースボックス(the Generalized Edgeworth Box)を考える。最低必要臨界量とは、それ以下には無差別曲線が存在し得ないほどの水準を示す。



辻村江太郎(1977)『経済政策』 p.134.

さて、エジワースにならない、X財を余暇時間、Y財を生活に必要な物資とする。

ここでエジワースをはじめとした古典派・新古典派は、A氏とB氏の取引が、両者の無差別曲線が存在するαゾーンのみで行われていると勘違いしたわけである。仮にαゾーンのみで取引が行われ、ゲームへの参加者が増加していけば、双方の自発的、対等な立場で

の市場取引によって、パレート改善が確実に達成される——すなわち厚生経済学第 1 定理が成立する。

そこで次に、 δ ゾーンについて考えてみる。この δ ゾーンでは、A氏もB氏も自活能力を持っていない。初期点が δ ゾーンの内部に落ちるという状況は、市場機能に委ねれば何とかという余地のまったくない状況である。スミスの言葉を借りれば、「狩猟民や漁労民という野蛮民族のあいだでは、働かざる個人は有用な労働に多少とも従事し、かれら自身のために、あるいはその家族または種族中の老齢、若年もしくは虚弱のいずれかによって狩猟や漁撈にでかけて行けぬような者のために生活必需品や便宜品をできるかぎり調達しようと努力する」となる。この δ ゾーンの存在から、社会保障政策が存在する一つの理由が生まれる。

さらに、今、これもエジワースにならいA氏を労働者、B氏を雇い主としよう。先のスミスの言葉「労働者には、仕事がなければ一週間ともたない人が多く、一ヶ月持つ人は希だし、1年もつ人はまずいない」は、A氏の初期点が β_A ゾーンにあることを意味する。この時、B氏は S_A 点よりもB氏にとって不利になる点で契約を結ぶインセンティブをかけらも持たないことになる。

この額縁付きエジワースボックスは、昨今の労働問題、つまり、労働と福祉の接点を考察する上で、若干の示唆を与えてくれることになる。

アダム・スミスがみた18世紀後半の労働市場とは異なり、いまの先進国では、どこにも生活保護制度や失業手当を給付する雇用保険、そして最低賃金制がある。これは、スミスの言う「労働者には、仕事がなければ一週間ともたない人が多く、一ヶ月持つ人は希だし、1年もつ人はまずいない」という労働者側の不利な立場を補正する役割をはたす。ところが日本の生活保護制度、失業給付、最低賃金は脆弱であり、ゆえに労働と福祉の境界に位置する人たちは労働市場で自らの労働力を窮迫販売せざるを得ない状況にあることは専門家の間ではひろく知られている。

そうした労働市場を外から支える、もしくは労働市場を下から支える福祉が弱い日本の労働市場で、柔軟性が強く求められて規制緩和が進められ、労働者の交渉上の地歩の弱さを補正する政策、労働者の生活の安定性を保障する政策を怠っているとどうなるかは、想像に難くない。

α ゾーンでの市場取引は、それなりに望ましい結果をもたらしてくれることは、新古典派経済学が言うとおりであり、それ自体を否定することは難しい。けれども、労働市場というところは、市場にまったく介入がない自由放任のもとでは、労働者が β ゾーンに陥ることもあるという特徴をもっているのである。したがって、アダム・スミスは、労働者を α ゾーンでの取引に参加できるように、要するに、労使の交渉が公正に行われるように労

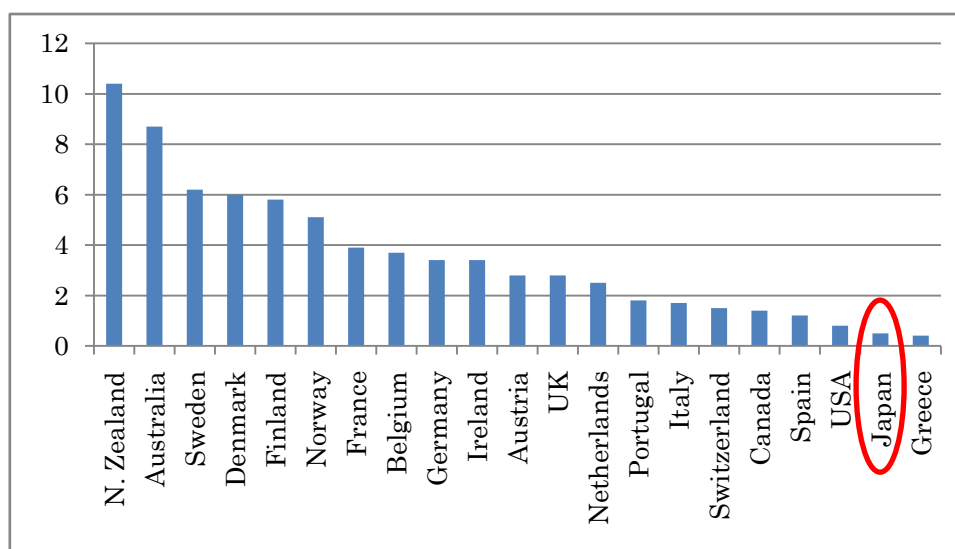
働者にハンディ・キャップを与える政策を積極的に展開することを説いていた。つまり、アダム・スミスは「能動的自由放任主義者」であったのであり、労使間の交渉上の地歩のアンバランスに気づいていなかったリカード以降の「消極的自由放任主義者」とは 180 度、政策の方向性が異なっていた。

歴史上、アダム・スミスの次に、この「労使間の交渉上の地歩のアンバランス」を強く問題視したのはマルクスであり、そしてマルクスの没年に誕生したケインズも、この問題を十分に認識していた。

さて、こうしたお話のつづき、特に額縁付きエジワースボックスとマクロ経済、経済政策との関係などについては、来年、僕の講義にでもご出席くださいな。時節柄、そういう話でもせねばな。

最後に、日本の生活保護というのは、こんな感じ。

図 1 生活保護給付費の GDP に占める割合(1995 年)



Kathy Lindert (2002), *Survey of Social Assistance in OECD Countries*, Abt Associates Inc., p.14, Table-1 Survey of Social Assistance in OECD Countries.

それなのに、社会保障国民会議の雇用年金分科会にはこういう事実を知らない人たちも多かったようで、生活保護をいかに効率化すべきかで盛り上がりとしていたときには、いつものことながら、大いに呆れた。

もしお手すきでしたら、議論の流れに水を差す K 委員の発言をご参照あれ。

勿凝学問 190 [「地方を活性化する」とか「中産階級を生む」とかというのは意図的にやらないとできっこないんです—社会保障国民会第 7 回雇用年金分科会 \(9 月 8 日開催\) での発言](#)